

ガーナの楽しい選挙

はまだ あきのり
浜田 明範 民博 機関研究員

音楽をかける選挙カー

二〇二二年二月、ガーナ共和国では大統領選挙がおこなわれた。一九九二年に民政に復帰してから六度目となる大統領選挙は、投票後に多少の混乱が見られたものの、おおむね平和裏に実施された。これをうけて、ガーナの民主主義は徐々に成熟してきているという認識が、欧米でも一般的になりつつある。しかし、選挙活動をつぶさに見てみると、人びとは選挙に真剣に取り組むというよりは、楽しんでいようだ。

選挙日が近づいてくると、ゆつくりと町中を移動する選挙カーに頻繁に遭遇することになる。選挙カーには、候補者の顔写真とキャッチフレーズが張られ、スピーカーが備え付けられている。荷台にプラスチックバンドを載せた小型トラックが使用されることもある。いずれの場合も、重要なのは大音量で音楽を流すことだ。実際、たとえ直接目にするのがなかったとしても、選挙カーが近づいてくると、すぐに気づくことができる。人びとは、その音楽にあわせて歌を歌い、ダンスをしながら行進する。人数が少ないうちは選挙カーの後ろに

列をなしているが、次第に群衆が集まってくると、選挙カーの前や横にも陣取って大騒ぎをしながら行進が続けられる。



ガーナの選挙カー。スピーカーから流されるのはことばではなく音楽である。2012年12月1日、ガーナ共和国プランカシ町にて

踊っているのは誰か

しかし、このような熱狂的な選挙活動に参加している人びとは、必ずしも特定の政党を支持しているわけではない。選挙カーの周囲で踊る人びとや、行進に向けて手を振っている人びとはそれぞれの候補の支持者であるはずだ。しかし実際には、自分が支持する候補でなくても、一緒になつて騒ぎ立てる者も少なくない。選挙キャンペーンを真剣に楽しむことと、政治的に真摯であることは必ずしも一致しないのである。

ガーナの人びとにとって、選挙は純粋に楽しいものだ。そう聞くと、どこか不真面目な印象をもたれるかもしれない。しかし、ガーナの大統領選挙の投票率は八〇パーセントに達する。そうであるならば、むしろ日本の選挙にはおもしろみが少し欠けているようにも思えてくるのである。